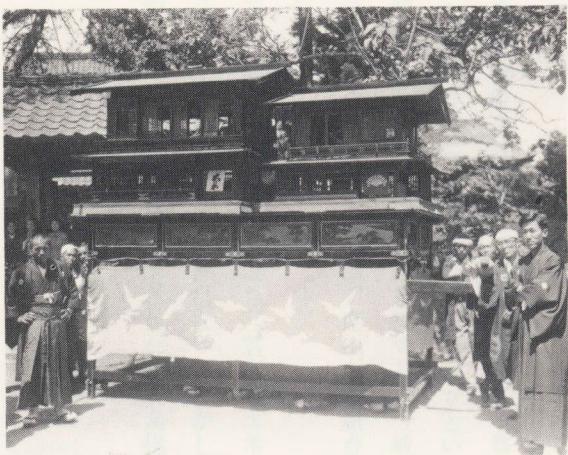


第七章

庵

唄



東上町の庵屋台

一、曳山祭と若者たち

祭と若者

神輿を担ぎ、獅子を舞い、山車を曳いて若者のエネルギーを発散させるのも、各地に見られる祭礼の一つの型である。原始的には、人間の体力・精神力をむき出しにしての競技によつて神意をうかがうという意義があつたのであろう。福光や井波の勇壮な神輿祭、福野の夜高祭や伏木の喧嘩山などがそれである。城端でも、昔は神輿担ぎや曳山のひき手は若者たちであつたろう。ところがその後の城端祭では、曳山と庵屋台を持つ六カ町の若者の役割は、庵屋台の芸能を担当することになつた。

庵屋台の祭囃子は、笛・太鼓・三味線の演奏であり、それに合わせて唄う若者たち。若者のエネルギー発散の形式としては、きわめて消極的である。そこにはギラギラ輝く太陽のような情熱はない。しかし陰影を投げる月光のような頬廻はない。そこにあるのは、内面に秘めた爽やかな情熱と積みかさねた伝統文化の重みである。

祭礼と芸能屋台

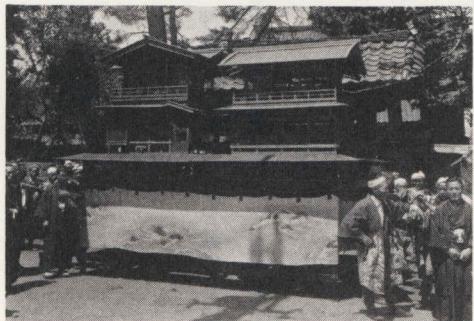
城端における祭礼芸能は、享保四年（一七一九）の装束踊りに始まる。その時に三味線は二挺用いているが、その後の経過は全く不明である。藩政時代は、一般庶民の芸能には厳しい制限があつたから、特に三味線の使

用は取締まられていたであろう。しかし、文化・文政ごろになると取締りも緩和されて、曳山祭の庵屋台に端^は唄調の庵唄^{うた}が取入れられたものと思われる。

曳山を持つ各町が、曳山の前に庵屋台を配置して若者たちに芸を競わせ、さらに、現在では廃絶したが、庵屋台の前に子供たちの扮装する「前囃子」を歩かせて行列をいつそう華やかなものにしたのである。曳山祭は見せる祭と同時に、聞かせる祭、芸能を競い合う祭となつたのである。

砺波地方の各町を見ても、幕末から明治にかけて祭礼における芸能の競演が流行し、福光・福野・井波・石動などにも庵風の芸能屋台が造られた。

西上町の庵屋台



福光では、文久二年（一八六二）から鳥居組（本町）・神楽組（西町）・御幣組（東町）・錨組（川原町・味噌屋町）・剣組（荒町・五宝町）の五つの屋台が始められた。福野では、弘化年間（一八四四）に始まる横町・上町・新町・浦町の曳山に付属して宮殿を模した屋台が出来た。その後、明治二九年から御蔵町も加わって五台になつたが、昭和の初めごろに廃絶した。井波では、明治以降御殿造りの屋台が始まり、明治四五年には今町、中新町、三日町、北川・北新町、八日町、畠方町の六台を曳きまわしている。

また、砺波市出町では、川原町が大正六年に城端の西上町から古い庵屋台を譲り受けたり、小矢部市津沢でも出丸町から古い庵屋台を購入したが、

いざれも長続きしなかつた。

若連中の構成

庵屋台を運営する若者たちの組織が“若連中”である。庵屋台のある各町の若連中は、昔は一五、六歳から三五歳までの青年で組織していたが、いまは二〇歳から四〇歳位まで年齢を延長した町内が多い。また各町の若連中では、それぞれ昔からの会名を継承し、日頃から庵唄、祭囃子の稽古に心掛けている。

屋台の中に入る囃子方は昔は八人で、これを「芸人」といい、それに選ばれることは若者の誇りであった。

町名	若連中の会名	古い呼称	年齢	人数
西下町	諫鼓共和国	諫鼓連・かんこ連	三五歳まで	二八
西上町	恵友会	恵美須連・ゑびす連	四二	四一
東下町	宝槌会	宝連・たから連	四二	二七
出丸町	布袋同志会	布袋組	四〇	三一
大工町	冠友会	千枚組	四二	一四
東上町	松声会	寿老組	一九	

（昭和五〇年）

出丸町には明治四年からの若連中記録が残っている。その中には祭礼経費の収支なども記されているが、若連中への花は、明治四年は御坊（善徳寺）から生菓子一〇〇、その他に酒二升が二件あり、わずかに三件であ

る。明治五年は酒二升が六件、明治八年は酒二升二件・生菓子五〇が一件・金二〇銭が一件の計四件にすぎない。ところが、明治一〇年から花の数が一〇数件となり、一八年には三〇数件となっている。有志の中には料理屋の芸妓からのものもあり、庵唄所望の新しい動きがうかがわれる。

明治十八年酉五月 花 覚

花

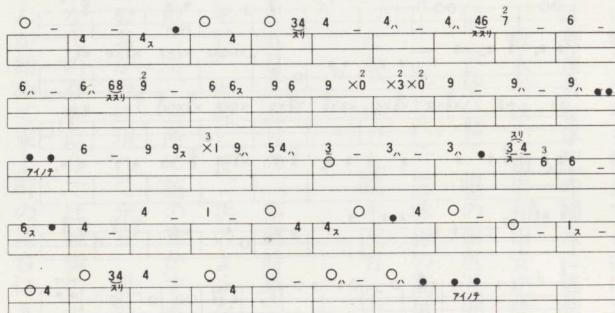
四

一、金五拾錢	西川 伊三郎	一、酒壹升	安谷 清七	一、生菓子三拾五	野原 甚七
一、金貳拾錢	岸 與右衛門	一、酒壹升	宮永 八吉郎	一、生菓子三拾五	橋場 セイ
一、金貳拾錢	泉川 與作	一、酒貳升	浅野 茂平	一、鱈壹本	石崎 甚太
一、金拾錢	松本	一、酒貳升	吉崎 與平	一、金拾錢	岸 又平
一、金拾錢	日野	一、酒壹升	篠井 萬三郎	一、金壹円	諏東 栄三
一、酒貳升	東上町若連中	一、酒壹升	篠田 市右衛門	一、酒壹升	岩倉 文右衛門
一、酒壹升	河合 弥一郎	一、酒壹升	荒木 文平	一、	嘉市郎
一、酒三升	山下 三人	一、醤油壹升	伊藤 市曹	一、	
一、酒貳升	鳴田 佐八郎	一、金拾錢	藤井 安太郎	一、	
一、酒貳升	山村 内	一、金拾錢	山本 半兵衛	一、	
一、酒貳升	都山内 種吉	一、生菓子百	本 畑	一、酒壹升	
一、酒貳升	福原 市兵衛	一、生菓子五拾	井 理平	一、金參拾錢	
一、酒貳升	山村 みよ				
富井 彦市	大田原 理市郎				

しかし、明治一九年には一五件、二〇年には一四件となつており、その年によつて増減がある。その後、庵唄の所望制度が取り入れられて、今日のよつた形式に移行したものと思われる。

西下町庵屋台廻り合囃

(本調子) 静かに品よく



二、屋台囃子と庵唄

屋台囃子

庵屋台の音楽には、進行中または休憩中に演奏する「まわりあい」と称する間奏曲と、休憩中々演奏する「休囃子」と、早朝御旅所まで神輿を迎えて行く時演奏した「本囃子」がある。本囃子は高い調子の雅楽に似た曲であるが、最近後継者が少くなり、また曳山練廻しの巡路の変更などの理由で廃れた。

囃子は、「祇園囃子」といわれているが、城端独特のもので、昔からその時代その時代の三味線や笛の巧者の工夫によつて出来上つた音律の極めて典雅なものである。現在のまわりあいは、東下町の作者は不明であるが、出丸町と東上町、大工町の作者は荒木友吉で、西下町と西上町は田尻五郎であるといわれている。それぞれ作者の特徴が現われていて傑作である。休囃子は、その町特有の囃子をもつてゐる町と、

西下町庵屋台休囃

(三下り) 陽気に少しおそく

A page of musical notation for a string quartet, featuring six staves of music with various notes, rests, and dynamic markings. The notation includes a mix of common and scientific notation, with note heads and stems. The staves are separated by horizontal lines, and the music spans across multiple measures. The notation is dense and requires a musical score to fully interpret.

出丸町 前引

前引

荒木 友吉 作曲

和田安之助 編曲

ン（ヨーイ）チン チン（ハア）チン チン リン ツン テン（イーヤ）トン チン チン リン チン
リン チン テン トン チン チン リン シャン（イヤ）チン チン チン チン リン チン チン

「六段の調」とか「紅葉狩」等を演奏している町もある。楽器は三味線と横笛（篠笛）で、それに大太鼓と小太鼓が入る。笛は特に低調子の二本調子のものが多い。囃子方は、昔から男ばかりというのが城端祭の特色である。若連中として二〇歳から四〇歳位までの青壯年で編成され、時代毎に名手が現われて、伝統が受け継がれてきている。

チ
ン
リ
ン
ツ
ン
ル
ー
ン
ツ
ン
テ
ン
ツ
ン
テ
ン
ス
ル
ン
ト
ー
ン
ト
ー
ン
ト
ロ
ー
ン

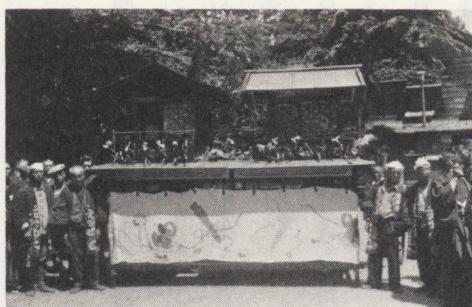
庵唄の名手たち

庵屋台の囃子や唄を担当するのは各町の若連中であるが、これを指導する師匠は主に若連中の先輩たちである。時には芸達者な年配の婦人に依頼することもある。三味線や笛や唄の名手には、故人では、笛の和田安之助（一八七四—一九四四）・浜田文蔵（一八八六—一九六七）、唄の田尻五郎（一八七六—一九三七）・笛田外次（一八八九—一九六八）、三味線の高城三好（一九二二—一九六一）などが有名であったが、中でも荒木友吉（一八八〇—一九三八）の功績は大きかつたという。

昭和九年五月二十五日の「南砺時事」読者課題欄に、『屋台に出てから今年が四十一年目』と題して、次のような記事が載っている。

『桜が散つて、各所に笛の音がする様になると、忘れられて居た様な荒木友吉氏の名が俄に現れて来る。黒い羽織でシヤナリ／＼と稽古に出掛ける芸人風な氏の存在は今では城端の一名物なのである。（中略）

荒木さんが始めて東上町の屋台に入ったのは十五才の時で、今年で四十一年目である相な。中々古いものだ。其の間、一年も休んだ事はない。かつて三十八度の高熱を排して出たがとても敵はないで、途中から帰宅した



大工町の庵屋台
伊勢物語から取材してつくった。

年が一度あつたのみである相だから正に連合会より精勤賞を贈るに足るべき功労者である。

最初は笛をやられた相であるが何分にも芸と来ては何でも御座れの達人だから漸次、手をひろめ、三味から唄まで一切の指導をされる様になつたわけで、氏に師事した若い衆は極めて多く、今日、各町の屋台に出る人々の中枢人物は大方、お弟子さんのみだから豪勢なものである。（中略）

今日の荒木氏は穏和な、師匠さんのタイプだが、其の過去は波乱重畳であつた。城端町長、組頭等をつとめて華やかな政治舞台に活動されし事もあつたが斯ふした方面とはヅツリと関係を断ち、風雅な生活に消光し、夏は鮎、秋は茸狩等々、人の羨む樂天振りである。（中略）

今日では、城端祭りと荒木氏は不可分の関係にあり、年々、お祭りの宣伝が百パーントの効果を示し盛賑の度を加へると同時に、荒木氏の名物的存在はます（有名となつて來たのである。（後略）』

庵唄の変遷

庵唄は端唄で、江戸時代から伝來のもののほかに、年によつて替唄も作られた。元唄は例えは、夕暮・薄墨・玉川・夏は螢・重ね扇・宇治・川竹・忍ぶ恋路等が多いが、昨今は歌調も時代の推移とともに変り、小唄調も取り入れられてきた。

西下町には文政五年（一八二二）、東上町には文久元年（一八六一）以降の庵唄の稽古番の記録がある。しかし、その当時のよつな唄が稽古されたかは明らかでない。出丸町に明治八年（一八七五）からの庵唄の歌詞が残つてゐる。

【明治八年】

(三下り)

君のあらたなめぐみにて 都も鄙もおしなべて 千代も八千代も玉椿 (合)月にかつらのいもとせや しか
も今宵はくもりなき 深きちぎりぞたのもしや

【明治一二二年】

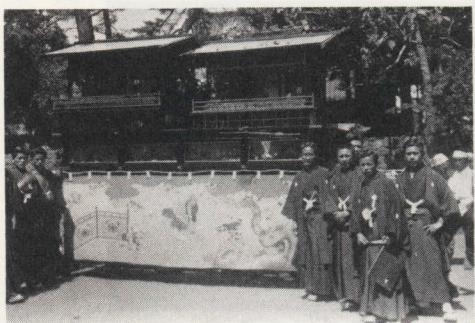
(二上り)

春日さす ふじのうらはのうらとけて 色にいださぬ 袱にもれて 思ひをききしむらさきの その名あだ
なり藤はかま むかしをしのぶ夜もすがら かよふてもどる しののめ
の 雁もなき行く あけばののそら

(本調子)

みだる、髪をゆふぐれの ツイなでつけの水かごみ (合) いふにゆはれ
ぬこゝろねを たれしら玉のむねのうち (合) つゆにくだけてそでぬら
す おもいのやみぞやるせなや

出丸町の庵屋台



【明治一三年】

(本調子) (元唄「玉川」)

恋草の露もなさけも君がため 袖はなみだのたまだすき せめてゆめに

もうちとけて ねやの月さへ寝みだれて また来る宵をまつち山
 玉川の水にさらせし ゆきのはだ つもるくぜつの そのうちに と
 けししまだの もつれがみ おもいださずにわすれずに またくる春
 をまつぞいな

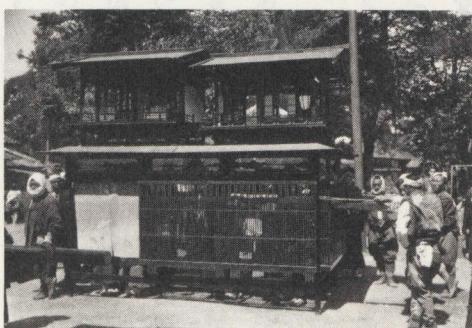
【明治一四年】

(三下り) (元唄「五大力」)

ちぎりし人も 八橋の 沢辺に匂ふかきつばた ひとしほ色を 通い
 しのびて今とても 花はかたみぞ 名所くの みちすがら ぬしは
 むかしの 業平の おもいはたりし あだ姿 色を通ひしのびて い
 くぞえ

色かをむすぶ松山に あいたやみたや恋しやと ねがいの糸の二上りや
 にうつして はれなばなぎの 花のかげ みやまばかりのあさかすみ

そして、明治一五年は「恋の渕瀬に」、一六年は「そらをどこから」、一七年は「ながれしとふて」・「君の為な
 ら」、一八年は「雁にはなせば」、一九年は「夏の夜の」と続いている。
 雁にはなせば つばめに返事 おもひの渕や あすか川 ながれの里に ひく三味線は いとし男にみさほ



東下町の庵屋台

重組に格子をとどめているのはこの屋台だけ
 である。

をたてん なんのその いまはうれしき ますかゞみ

【明治二三年】

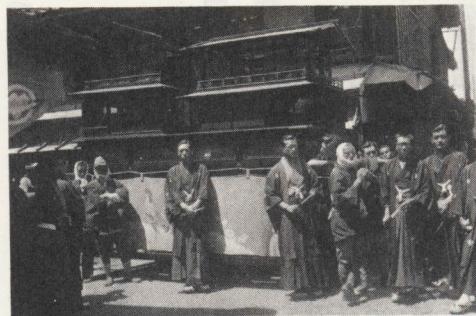
朝つゆに 濡れて色増す杜若 江戸紫の恋中を さくやつゝじの唐くれないに 染めて若葉のふかみどり
かけをうつきの花の白雪

(二上り)

【明治二四年】

(本調子)

もう袖に かおれるかぜはたち花の いろふる里のさつきさめ はれて
うれしきあさぞらに なくねをもらす時鳥 しのびし君にあおばとは
サテうの花の世の中じや



西下町の庵屋台
京都の一力や角屋の造作を模したという。

【明治二五年】

これらの歌詞の作者はわからないが、明治二五年以降の分には、"有川ノ
作" というのが六、"北市屋妻" が一つある。有川作には "有川土豊" とも
記されており、当時出丸町居住の有川文助である。

(三下り) 有川土豊作

柳はまねき鳥はよぶ 四方のけしきのその中に たつやうすのうすごろも きがへてうつるさほひめの あ

とふく風もかほるらん けさは卯月のためしとて ほんにゆかしき時鳥

【明治二六年】

(三下り)

有川土豊作

そこは見えねどいろふかき 苦海の波の浮寝鳥 一夜明石のきぬぐに (是れより本調子) ないても須磨のうらめしや 意氣地を義理に播磨潟 うたへよ高砂 おどれよ舞子の浜風に うきかふ白帆のおもしろや(＼)

【明治二七年】

(二上り)

有川土文作

君が代の 惠みひとしく柴の戸も 玉のうてなも時めきて 軒端にかをる立花の 風四方にたなびく 日の出のおはた

【明治二八年】

(三上り)

有川土豊作

しら露の むすびていろの涼見草 ふかきちぎりをもらさじと 心に思ひをかきつばた いつか青葉とまつの戸を たゞく水鶏にさまされて 夢路ゆくまも夏の夜は ほんにみじかき月のかげ

【明治二九年】

(本調子)

作者 北市屋妻

ちら／＼と 夜風にちるや遅桜 にほへるかげを鶯の こゑにかしゆく 垣の卯の花しろ／＼と いつしか

あけてしののめの そらに五月の月低く はやきぬぎぬの妹背鳥

【明治三〇年】

(三下り) 有川土豊作

誰に青葉の時鳥 しのぶ初音や立花の 木の下かけのすゞしさになつ
をよそなる雪見草 庭も垣根も白妙の 藤にゆかりのかきつばた

(三下り) 誰に青葉の作り替 (九月の豊年盆)

秋の実のりの豊けさに 賤うすが軒端のきばも時めきて みづ穂ほしたゝる露つゆしぐれ
そむる野山の薄うすもみぢ あかねさす日も入あいの 空そらやにぎはふ雁かりの

声

【明治三二年】

(本調子)

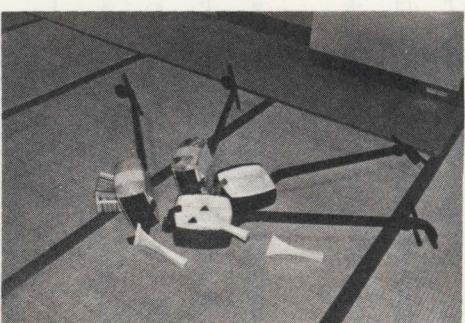
有川土豊作

世の中を まゝにならぬと誰がいひし 鉄路かんなじゆくなりゆげ車 ゆめかうつ、か三笠の月や 京の花までめぐ
りてかへる 問ひつ答へつ針ばね金かなの 糸ももの言ふ世の中を ままにならぬと誰がいひし

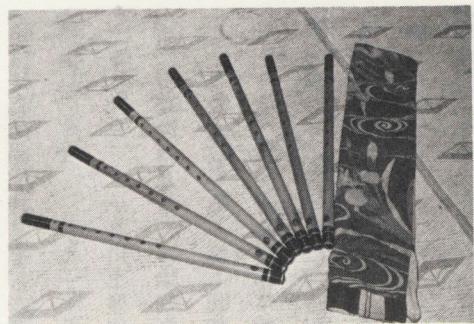
(明治三〇年一〇月に城端へ鉄道と電信が開通した。)

【明治三三年】

八雲たつ 出雲八重垣妻琴の 音にかよふなる松風や 千代も八千代もすへ久方の そらを仰げば田鶴の声
離はなも待またれて いとゞたのしき



屋台囃子の三味線



屋台囃子の笛

大工町には、明治二二年（一八八八）からの歌詞が記録されている。

【明治二二年】

君は今 駒かたあたり時鳥 啼いて別れの月かなし 宵のまゝなる打懸の 心にかかる名古屋帶 結んでと
きて幾夜さの かずの枕も皆その人に たてしみさをの消えもせで 今に匂ひを伽羅の下駄

【明治二二年】

青葉かくれの郭公 啼く夜仇なる一人寝の 枕相手にそらだきも とのをまつかい洩る月に 君を思ひのま

すかゞみ うつせどくもるむねのうち あはぬ細布のけいもせで意をや
すく

【明治二三年】（三下り）

紫は 色のつかさやかきつばた 花をねぐらにおし鳥の つがいはなれ
ぬ妹背中 ちぎりもかたき岩橋の みじかき夜半も業平と 語り明せし
むつ言は よその見る目もづらやまし それ色の世じやないかいな

【明治二四年】（本調子）

妻もつまこゝう河骨の やさしくさくや玉川に 深きちぎりもおし鳥の
つがい浮き寝のあの波枕 ほんに思ひは いとゞ恋しき業平や 吾妻の
空にそよと吹く あの涼風に一言の よすがを処 かきつばた

【明治二五年】（本調子）

玉川の 水に清めし雪の肌 身にしみそめし恋風に 解し鳴田のもつれ髪 君にあふせを待つ夜半は あれ
鳥が啼く暁は いつとしの仇名草

【明治二六年】

床しさや かこいのうちの茶つみ歌 さりとはすいな二人が中の忍び駒 さりとは粹なあのつめ引も 世を
宇治川の水調子 流れの身にも嬉しやと ほんに濃茶のゑんじやいな

【明治二七年】

待ちわびる 心そのまゝ郭公 月かげふけるねやのうち 名のみ仇なる忘れ草 せつなるむねに玄けむり
もゆる思ひを深みどり 草葉の露も光りそら 夜明の鐘もしらぬいの れしにこゝろを筑紫かた

【明治二八年】

床しさや すめりこしなる藤ばたん 色香も深く咲みだれたる よそをいの奥には粹なあのつめ引も 世に
も樂しき風情なる もれき氣もともぐに 嬉しき花の縁じやいな

【明治二九年】

花に啼く 黄鳥さいも 水に住む 蛙も歌を唄ふなる 君が御代とて末久しきて 実るやみづのそのもとに
住める民こそ世々に栄えん

【明治三〇年】

逢坂の里のほとりにおひ立ちし 花のかんざし月の眉 ねくはいやまし春風に 情を運ぶ仇姿 ながめつき

せぬ玉川に 深き心をくみわけて 待つ夜嬉しき思ひかな

次の明治三十一年には、明治の城端大火で曳山祭は中止、大工町は庵屋台を焼失して翌三二年も庵唄は止めたが、三三年からは再開している。

【明治三三年】

雲も霞も晴れ渡り まばゆくさくや山桜 句ふ朝日も麗かに 気もはれ
くと浮き立ちて 實に面白き花の頃 遊び集ひて舞ひうたふ 姿も御
代のためしかな

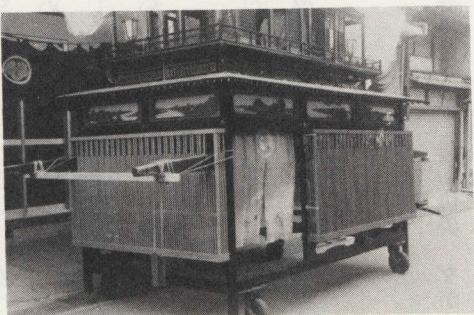
【明治三四年】

濡るゝさへ 嬉しかりけれ春雨に 潤ふ藤の一雲 薄紫の花の浪 か
れる松に色添へて うつろふ水に浅からぬ 底さへ句ふ多古の浦 深きゆかりじやないかいな

庵唄の所望に短冊をくばるようになったのは、明治三二年～三五年頃からではないかと思われる。短冊に書かれた干支によつて、その年の各町の庵唄を推定し、章末に掲げる。

替唄のかずかず

替唄の多くは、やはり端唄のもつ風雅な情緒を歌詞にしたものであるが、中には世相にちなむものや城端の



東上町の庵屋台
江戸吉原の鶴屋・玉屋・扇屋・大文字屋の前景を模したもの。

自然や生活、あるいは曳山祭の情景を歌い込んだ作品もある。

西下町・諫鼓共和会（かんこ連）

「春を呼ぶ」（明治三六年）

春を呼ぶつる かきつばた 由縁ゆかりも深き 八つ橋や 花紫の舞い衣 かざす袂に夕月の エイ照りそえて妹

背川

「青柳」（明治四三年）

むつとして 帰りかけたる小庭先 風に順ふ青柳に 逆ふた口の恥かしく どううわごとをしどけなく 乱
れ心の鶯アトリが、 ほゝと笑ふて枝移り

「洛東名所」（大正四年）

祇園の花も紅を 青葉にゆづる東山 茂る木蔭の黒谷に 風も涼しき清水や 音羽の滝の音にのみ 韶ハトく華

頂の鐘の声 月に更けゆく 高台寺

「近江八景」（大正初期）

石山や高根の月の影すみて 松に栄はえある唐崎の 浜辺に帰る矢橋舟 堅田の雁や比良の雪 木の間かくれ
に三井の鐘 濑田の夕日を粟津瀬 蓦れてそよ／＼吹く嵐

東上町・松声会（寿老組）

「四季の花」
(明治三五年)

君が代の光を諷ふ花鳥や 鶴は朝日に舞い群れて あをげよと亀をまつ宵月の 影を照らさん色氣もはや
早稻の香りの雁の来て 小春の柳もそよ／＼と 富みてたのしき年のものがたり

「春 祭」
(明治三六年)

美流からに 長閑けき春の空なれや 玉の簾を巻き上げて 仰げよわらべと待つ曳山の あたりさまよう人々も
はや笛の音に迷い来て 庵のながめにたよ／＼と 豪きをわする、影のおもしろさ

「水の園」
(明治四二年)

春の花 桜か池のともしかげ 夏は清水のかきつばた 一声洩らせしほ
とゝぎす あかぬは秋の天の川 アレ雪はだの袴腰 冬やほころぶ梅の花

「山人形」
(明治四四年)

一つ寿老の鶴の声 二には関羽の戦神 三に恵みの桜鯛 四には大黒米
俵 五つ布袋の唐子好き 六に堯王カンコ鳥 明治の御代や祝ふらん

出丸町の庵屋台



大工町・冠友会（千枚組）

「櫻太鼓」
(明治三五年)

櫓太鼓にハヤ霧はれて 青葉や茂れる臯月空 横にそよぐ天津風 雲井に通ふ谷の音 高き響矢 常陸山
みどり流る、稻川や 水上匂ふ梅ヶ谷

「觀艦式」（明治三六年）

須磨や明石のアノ浦々に あつまる数のいくさ船 君が稜威^{りょうい}は高千穂に アレ鷹の来て松嶋や 千歳を君に
捧げぬる 秋津島根の丈夫^{まつわ}が 大和心は敷島の 朝日に匂ふ吉野山

「我武維揚」（元唄 「門の青柳」 大正五年）

大君の稜威を仰ぐ旭の国旗 内外をなべて匂ふなる あの山桜 咲にも散にも潔き 吾が敷島の益荒猛男の
誉も遠く 薫るや菊の名も高く 栄え行く世ぞ久しけれ

「鏡の前」（元唄 「葛の葉」 大正六年）

垂れし乳房はふくよかに ほつれし髪をかきあげつ 涼しき瞳に笑見せて 浴槽を出でし肌の色 花愧ろふ
や薄化粧 鏡の前に立姿

唄

第七章 廉

西上町・恵友会（ゑびす連）

「觀艦式」（明治三九年）

山桜の 香り残らん青山の 場に集いてあまたの旗の 今ぞ栄えある武夫や いとも畏きこの式の これぞ
嬉しきはじめなれ 去年の胡砂ふく征衣のころも 今日ひきかえし花ころも アレ治まる御代じやないかい
な

「桜 鯛」（明治四一年）

この里の春の祭の賑わしさ なかに勝りて勇みに勇む 清き水浪恵比須山 いとも畏きこの君は 商ひ神と
云われて ところ寿ぐ巖の浪に 浮きたつ月は黄金色 アレ今宵や花の桜鯛

「四季の故郷」（大正五年）

花のこころは桜にたくし、忍ぶ蛍は山田川 流れの身さへ恋風の アレそよ／＼と秋風は 雁の玉章霜の月
エ、雪の姿の袴ごし

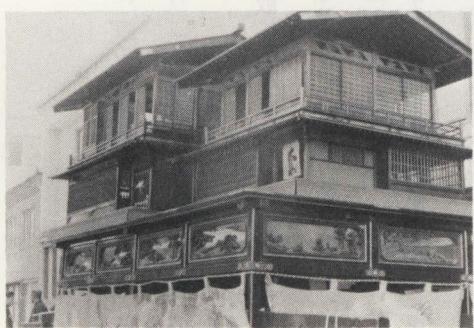
「織 姫」（大正年間）

色もよし 姿もやさし織ひめの 栄ゆくきぬの産がくは 八百よろずを
も越へぬらん アレかち／＼とおさの音の ひゞきうれしき通ひ糸
たりの仲のむすび神

東下町・宝槌会（たから連）

「初松魚」（明治三九・四〇年）

目に青葉 風も香らむ皐月晴 東男の勇み肌 伊達と意氣地に世を渡る
引かぬ気性の山時鳥 かたく結んだ鉢巻きの びんとはねたる初松魚
添えたる笛の濡れ色も ほんに勢いぢやないかいな



東下町の庵屋台

「隅田川」 篠井竹里作（明治四四年）

すみ田川 下す筏にちらほらと 雪かあらぬか散る花の さざなみさそづ夕あらし 月もいつしかてり添え
て 玉をころがす水の面 あかぬながめじやないかいな

「恋の流れ」 篠井竹里作（大正六年）

繩ヶ池 とけて流る、池川や むねの思ひもうち合ひて 末を一つの山田川 ながき契を小矢部川 へだて
ぬ中の妹背岩

「浦の眺め」 田島城月作（大正七年）

晴れ渡る海に白帆のチラホラと 磯に綱曳く海人乙女 浪間に浮ぶ喜見城 ねぐら急ぐか群千鳥
屋の夕けむり 早や燃えそむる螢鳥賊 かけも苦くま

「皇太子成年式」 桐花治作（大正八年）

戦の雲もあとなく晴れわたり 白かけのときけ秋津島 民やすかれとしろしめす 天日嗣の大皇子が 宝祚
なりて初冠り 寿と今にぞ目出度し

「短か夜」（元唄「萩桔梗」）都山喜治作（大正九年）

うれしさは うつゝなりけり初夏の 短い夜半の かたりぐさ 君が情の未だ身に沁みて 潟るもにくや
明の鐘

出丸町・布袋同志会（布袋組）

「平和克服」（明治三九年）

きのふの仇は今日の友 垣根へだてし卯の花も 散ればあとなき雪見草 しげる桜の青葉にも 句ふ朝日の旗の風

「卯の花に」 洲崎淇石作（明治四三年）

卯の花にうき世を忍ぶ佗住居 をりふしたゝく水鶏さへも 今はうたてき五月雨や ぬれにし色のかきつばた 隔てぬ中の妹と背が 語るいとまも夏の夜は つい明け易き鐘の声

「悠紀主基の田植」（大正初期）

乙女らが 真紅の櫻 菖の笠 今日をはじめの田植歌 悠紀の美田や主基切る斎田 玉の早苗をとり急ぎ瑞穂垂れよと祈るらん

「ふるさと」（町名不明）

越の山鄙のすまひに秋くれて 梢にのこる柿ひとつ いろにもいで、木の葉石 かたくもちぎる夫婦滝 ふかき情けの繩ヶ池 ほんに故郷はなつかしや

三、新しい替唄

替唄の作詞家たち

明治から大正へと、庵唄の歌詞は元唄の節にあわせた替唄がさかんに作られ、それがあたりまえのことになつていつた。有川文助（土豊）・洲崎永之助（淇石・一八六〇—一九二七）・篠井万蔵（竹里・一八七七—一九五六）・都山喜治（桐花治・一八九一—一九三三）らがその作詞家である。大正から昭和にかけては荒木友吉（兎月・一八八〇—一九三八）・田島恵造（城月・一八九五—一九三八）・野村淳（満花城・一八八八—一九六八）・宮岡周三郎（珠鑄樓・一八九三—一九六〇）・洲崎哲二（天辻・一八九〇—一九六三）・笛井勝之（城華子・一八九三—一九七二）・高城三好（石南・一九一二—一九六一）らが作詞し、昭和八年には六カ町のうち五カ町までが替唄で、昭和一二年には六カ町全部が替唄であった。しかしこの年に日中戦争が始まり、一三年以降は昭和一五年を除いて中断された。若者たちの多くは、戦場へと出征したのである。昭和一五年は皇紀二千六百年を祝して曳山祭が挙行され、庵屋台も出された。庵唄も世相に応じた歌詞が作られている。

新しい替唄

田島城月（一八九五—一九三八）
「橘」（元唄「萩桔梗」大正一四年 東下町）



屋台囃子の太鼓

たちばなに ふれし匂ひを忍ばせて 月に小櫛の あだ姿 今宵逢ふ人

みな美くしく 誰にかつげん 玉章を かくすたもとの つゝましや

「春惜む」 (元唄「秋草」 昭和六年 東下町)

更へ衣 峯にのこんの白雪や 鳴く音も老へて 鶯の 霞む麓の胡蝶で
さへも 花のあと訪ふ睦まじき ほんに名残の 春じやぞへ

「藤の花」 (昭和七年 西上町)

谷川の 水に香うつす藤の花 思ひのたけをなが／＼と からむゑにし
の松ヶ枝や

「花のかげ」 (元唄「夏は螢」 昭和七年 東下町)

咲きも残らずちりもせで 薄にかすむ月の花 その下かげに人知れず
久しき君が訪れを 待ち明したる 露こそたえに 色香添えにし眺めや

「卯の花」 (昭和七年 東上町)

春もはや 暮れては白き卯の花に ものや思へと深き夜の 心も知らで一声は ほんにまあ いづ地へ行く
かほとゝぎす

「春祭」 (元唄「五月雨」 昭和八年 東下町)

りんとして 男日和の五月晴れ 三社の渡御の嚴かに 伶人達や鉢の列 絵巻のそれをさながらに うつす
曳き山翠亭に つるす屋台のべに灯し

「忍ぶ草」（昭和八年 西上町）

月のおぼろについさそはれて 軒端にいづるしのぶ草 あさき緑のしたゝりに アレ袖ぬらすそよ風や
みだれがちなる露の玉

「乙はめ鳥」（昭和八年 東上町）

青柳のなびく風情や軒の雨 つばめはぬれてむつまじく 慕ふすがたのしほらしや 今宵逢ふとの玉章も
やるせもなくて読み返す かしくと結ぶ筆のあと

「行春」（昭和九年 西上町）

春の名残りを遠山かけて 亂れそめにし薄かすみ とけしもすその移り
げな 梢を交わす鶯の 声も老せぬ花の色

「鯉幟」（元唄「川竹」昭和九年 東下町）

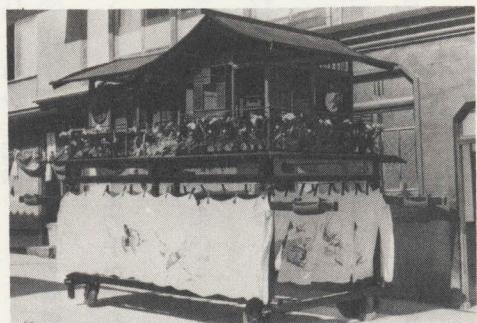
晴れわたる 御空に高き鯉のぼり 鄙も都もおしなべて 竹の園生の弥
栄を 寿ぎ奉らん葦原の 水もたたへてのどかなり

「春の雨」（昭和一〇年 西下町）

丸窓の 若葉にそよぐ春の雨 今し別れし淋しさよ 二つ三つ四つ盃を
重ねて見ても一人居は 鬢も心も乱れがち

「花の香」（元唄「我がもの」昭和一〇年 東下町）

花の香りに あかりを消して おばしまに粹な音メの三下り それさい



大工町の庵屋台

あきて寝もやらず 春にはそむくかりが音の 泪のあめかハラ／＼と ぬれてはづかし枕紙

「洗 髪」（元唄「薄墨」 昭和一一年 西上町）

夕ぐれの色移りする雪のあし 湯浴みのあとのはしきは 黄楊のお櫛にくる／＼と洗ひし髪の手かゞみにうつる封じの紙結び まつや臘の月ばかり

「牡 丹」（昭和一一年 西上町）

酒の香の まだ醒めやらぬ床のうち うつつに聴くは春雨か 濡れ羽の髪の匂ひかも 活けてゆかしき花牡

丹

「機どころ」（元唄「一声」 昭和一一年 東下町）

さほ姫の かけし衣か東山 霞にまがふ白絹を 綾なす唄の機どころ 古きゆかりの手をこめて 君に着せうとてふり袖の 京染鹿の子の品さだめ 鳴たつみの風が吹くわいな

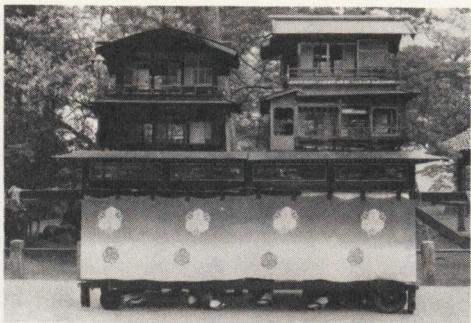
「霞」（元唄「書き送る」 昭和一二年 東下町）

何やらの 花がいとほし くれないに もえてみどりの葉がくれを 鳥のさえづり夢うつ、 山の梢に霞がとけて 流れながれる のどけさに 水もぬるみて 春は絵となる

「子 規」（元唄「空ほの」 昭和一二年 西下町）

若葉を通す宵やみの 風もすがしき 肌ざわり 花の匂ひか 夢の香の もつれ／＼て ものうきわしに鳴いてくれてか ほとゝぎす

「杜 若」（昭和一二年 大工町）



西上町の庵屋台

詠みすて、歌を東へ業平の 裳に残る濃紫 ゆかりの色の杜若 思ひ
渡らむ八つ橋の 雲井こひしき初冠 かほよ花とは 誰が名づけし
昭和一三年、田島城月子は四三才で不帰の人となつたが、その歌詞はそ
の後もたびたび使われている。「春惜む」は、昭和二五年・四五年に東下町、
四八年に出丸町が唄つてゐる。また「橋」は二七年・三八年・四一年に東下
町、四五年と五二年に出丸町、「鯉幟」は二八年・三五年、「花のかげ」は三
七年、「春祭」は四二年に東下町が用いてゐる。

野村満花城（一八八八—一九六八）

「浮草」（元唄「薄墨」 昭和八年 大工町）

恋の浮世かアレうき草よ 風に吹かれて定めなく 逢ふてはもつれもつれては さゝやく波にやつす花

「燕子花」（昭和九年 大工町）

八ツ橋の 清き流れの燕子花 誰が言ひ初めしゆかり色 ゆかりなつかし業平の 冠狩衣香に染めて 身に
添ふ花と残る唄 うたふもゆかしかほよ草

「忍ぶ恋」（昭和九年 西上町）

まぶのたよりか そとくちつきて 帯に秘めし結び文 抱いてしめたる思ひかも 千代や八千代と舞姫
のうたふ心を誰かしろ

「草の月」（昭和一一年 西上町）

しのび路の 懐かしきちかく 草の月 心も身をも はれ／＼と 照して嬉し 二人づれ 願もついに 見ゆるぞい

「片栗の花」（元唄「宇治」 昭和一二年 東上町）

若葉したゝる山々に 生ひてゆかしき 片栗草よ 色もゆかりの濃紫
二葉々々のすいた同士 咲いてうれしき花じやもの アレアレアレ 二
葉の仲じやもの

「惜春」（昭和一二年 西上町）

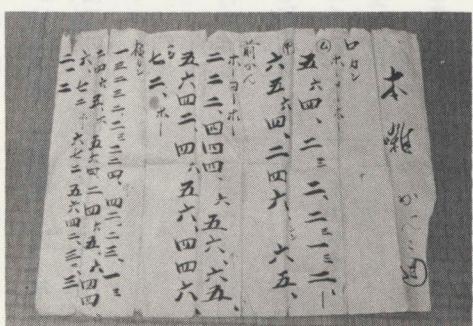
行く春の 思ひみだるゝ花吹雪 しづかに洗ふ黒髪の 若さをすけば
くしのはに あはれなつかし花のひとひら

「舞扇」（元唄「嘘とまこと」昭和一五年 大工町）

黄金 白銀 雲砂子 誰が筆になる 舞扇 心づくしの歌添へて 舞ふ
てつかれて よるおばしまに 人目をさけて じつと見る 扇のうた
に 笑む瞳

「かきつばた」（元唄「宇治」 昭和二二年 大工町）

いろはゆかりの かきつばた 水にうつりて葉平いほり かよひかよふて ひめすどり 羽根もゆかしきぬ
れたいろ うわさするよの にくらしや そうちや／＼ そうちやよ かほよぐさ やの音の音思ひ



舞台囃子の楽譜

洲崎天辻（一八九〇—一九六三）

「軍國ノ春」（昭和七年 西上町）

うぶすな　宮のかよい路　花さかり　朝日てりそひ　匂へるなかに　どんとひゞくはつはものが　國のま
もりときほひあふ　立野がはらのつゝのをと

「日支事変」（昭和七年 出丸町）

北満の　ひろ野くまなく　なびき伏し　南クリークさし渡す　謎の都の上海も　昇る朝日の旗の下　國のほ
まれは　いや高き

「祭の恋」（昭和八年 出丸町）

桐の花　かほりゆかしきむらさきの　ゆかりの色に匂ひぬる　恋も祭がとりもちよ　思ひはそれもかざり山
灯ともしごろのさんざめき　ホンニなつかしきはやしよナアー

「橋畔相聞」（昭和一二年 出丸町）

橋のたもとの　恋つじうらよ　あふてうれしき五月闇　螢とぶ間の　たまゆらも　惜しき名残の　仮まくら
ほんにみじかき　夏の夜や

「八咫鳥」（昭和一五年 東下町）

天のみいくさ　みちびきて　いさをし立てし　八咫鳥　そのふるごとも　いまにして　あほげば遠し　二つ
まり　アレ六もゝの　よいよい年よ　いざぐたゝえむ　よいやサア

八紘一字（昭和一五年　出丸町）

まつろはぬ あだはみながら うちふせて 椰子の実熟る、 はてまでも 日の丸の旗はためきて あめが
下をば字となす 遠きひじりのみをしへは いまぞみのりて 新亞細亜

〔新東亜〕
(昭和一五年 東上町)

宇陀の高幾に 鴨わな張りて 久米のやからと おほらかに うたひましけむ
うちてしやまむ たけきみけしき うけつぎて 今ぞ輝く 新東亞 築く力は 日の本の うちとにきほひ
て たのもしや

「五月晴」（昭和二年 出丸町）

「新憲法」（昭和二二年　出丸町）

干戈を とはにをさむる 新しき おきて布かれて 今よりは 男をみなが 手をとりて 世界のあゆみに
足並を ホンにそろえて 鳴爽と

〔福寿山〕（元唄「雪巴」）昭和二三年 東下町）

肩に袋を 植を手に 福寿に満つる 御像は 作者きほひて「後の世に直す人こそ可笑しけれ」大黒様のさ
て 出来のよさ

〔春祭〕
〔元唄「夕暮」〕昭和二三年
出丸町)

ゆく春のなごりつきせぬ神明道 花にまされる 葉ざくらの 青葉かくれに きらきらトウ アレおみこし
が こんじきに ゆらゆらわたるよ 日にはえて

「大城端誕生」
（元唄「夏は螢」
昭和二七年出丸町）

太平洋戦争が終つて、昭和二一年から曳山祭が復活し、庵唄も再開された。その後の替唄は、満花城、天辻のほかに高城石南、笹井城華子が作つてゐる。

庵

高城石南（一九二二—一九六一）

「紫」
（元唄「薄墨」）昭和二二一年西下町

むらさきの 色ゆたかなる 都久波禰の 夫婦の滝にしをらしや 山

路にのこるすみれ草
こぼれて末は池川の水にとけゆく山吹の鐘も聞えぬ
春の暮

「初
螢」
(元唄「秋の夜」 昭和二三年 西下町)

片恋の辛い思ひを 無理な酒 帰らぬ鳥の一声を 更けて待つ身の醉さめて ただ有明の月ばかり かたし
く袖に初萤 わしや照らされてゐるわいな

「惜春」（元唄「薄墨」 昭和三五年 西下町）

むらさきの 色ゆたかなる都久波禰の 山ほとゝぎす朝月夜 山路に残るすみれ草 こぼれて末は池川の
水にとけゆく明けの鐘 春を惜しみて啼く水鶴

笹井城華子（一八九三—一九七二）

「若草」（昭和三〇年 東下町）

若草や ほころび染まる 春の野に 緑も恋の深見草 浮名流して気儘にのびて 何時か花実が 咲き出で
て 濡れて嬉しい 仲じやぞえ

「菖蒲浴衣」（昭和三〇年 出丸町）

菖蒲浴衣は よい晴ぎぬよ 背にしつぱり伊達模様 主のためなら いつまでも 着けてながめて いる心
色が競ふ 恋のよく

「春ハ霞」（昭和三一年 東下町）

春ハかすみの花曇に 吹きくる風に そよ／＼と 惚れすごしたる 糸柳 結すべば顔に ひら／＼と ア
レあの蝶が 恋仲立ちて よい／＼ よい／＼ よいやさア

「露草」（昭和三一年 出丸町）

露草や ほころびそむる夏の夜に 思いを主に黄楊の櫛 心残して忍んで待てば 何時か情が世に出て濡れ
て 嬉しい仲じやぞえ

奉祝皇太子御成婚 「吳 竹」 (元唄 「川竹」 昭和三四年 東下町)

吳竹の契りはかたき 千代八千代 番い離れぬおしどりの 仲にさす月すや／＼と 情にひかれて袖しばる
ほんに縁起なことじやいな

「主は雲井」 (元唄 「雪巴」 昭和三四年 出丸町)

主に雲井に 春がすみ 手鞠が恋の 仲立ちや 鶴と亀との 三つ蒲団 ねむる塘鳥 さてうらやましいで
は ないかいな

「春はのどかに」 (元唄 「雪巴」 昭和四〇年 東下町)

春はのどかに 鳥の声 粋な浮世を 恋ゆえに 主に思ひを あこがれて 塙に帰る ほとゝぎす まだ口
青いぢや ないかいな

そのほか、昭和二三年に西上町が、三三年に西下町が高橋掬太郎の「仇波」、二五年に出丸町が故都山喜治の
「短か夜」を取りあげている。

「仇 波」 (元唄 「萩桔梗」 昭和二三年 西上町)

沖の瀬に 月は今宵も 影させど とゞく瀬のない わが想ひ 仇し仇波かへして寄せて 夢みるひまも涙
ぐむ つらい浮世じやないかいな

「まつりの頃」 (昭和六年 西上町 作者不明)

目に青葉 水に浮藻の花白き まつりの頃のたそがれに 月を待つ間の池川や 潟音涼しく鳴くかわす 二
ツ三ツ四ツ飛ぶ虫

〔庵 噴 年 表〕

庵 噴 年 表

													年
													明治三五
四	三	大正二	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	諫鼓共和会
洛東名所			二季草?	後朝?	青柳	涼風?	嵐山?	小督局?	田家煙?			春を呼ぶ	松声会
粹士の夏			忠臣蔵?	山人形	影ごろ	水の園	胡蝶	四時詠	花くらべ			春の舞祭	四季の花
橋にふれし			(元唄打ち水に)	初夏	(元唄梅にも春)	(浮世を余所の 京の四季)	(舞子の夕照 梅の春)	天橋	靖国の大祭			観艦式	櫓太鼓 (五月場所)
涼みの君			春氣色	夏の夜?			桜鯛	夏の夜	觀兵式			国の花	菅公
五月女?			詫住居?	隅田川(竹里作)	越の名所?	色よせ?	晚春?	初松魚	初松魚			花の化粧に?	恵友会
社頭松?			夏の夜?	富士の雪?	卯の花に (淇石作)	四方の海?	田植?	東風吹かば?	平和克服			あまだれや?	宝槌会
曳山なし	昭憲皇太后崩御	諒闇										日露戦争 飾り山のみ	世の中を? (有川土豊作)
												日露戦争で中止	布袋同志会
													備考

四	三	昭和二	一五	一四	一三	一二	一〇	九	八	七	六	大正五
愚痴 きぬ／＼の			恋しく	玉卯の川花	香水	一声	時雨降る?		小夜更けて?	九重の	裾野の誉	近江八景?
辻君			青柳	一声	鶴の巣籠	武藏野	短か夜?			薄墨	田植戻?	一人寝の?
川竹	八幡鐘		忍ぶ恋路 宇治色気ないとて	露の玉(田植戻)	薄墨	初夏の庭	昔男	軒簾おろして	竹石吾友 (元唄 葛の葉)	酒機嫌 (元唄 香水)	磯の松 (元唄 武藏野)	鏡の前 (元唄 葛の葉)
玉川			若みどり (花の名残り)	暮春	桐の雨	惜春	初夏	すみ田の里?	織姫?	螢?	織姫?	四季の故郷 (我武維揚 門の青柳)
重ね扇	花筏		辻君	橘(城月作) (元唄 萩桔梗)	泣くもぐち	萩桔梗	落ち櫛 (元唄 秋草)	恋の糸 (石村紫燈作) (元唄 萩桔梗)	短か夜 (都山喜治作)	皇太子成年式 (桐花治作)	浦の眺め (城月作)	恋の流れ (竹里作)
武藏野			わがもの	短夜(夏は螢)	雪巴	暁山雲	初夏?	明治神宮?		初夏?	浦の春?	悠紀主基の 田植?
			諒闇									

昭和五	桐の雨(燕)	鶴飼して	青柳	草の露(草の葉に)	五月雨	書き送る
六	仇な笑顔 萩桔梗	うたた寝	夏は蛍	まつりの頃	春惜む(城月作) (元唄秋草)	駒下駄
七	ほとぎす 卯の花(城月作)	夕暮	行春	軍國の春 (天辻作)	花のかげ (元唄夏は蛍)	日支事変 (天辻作)
八	薄墨 乙鳥(つばめ) (城月作)	浮草(満花城作)	忍ぶ草(城月作)	藤の花(城月作)	春祭(城月作) (元唄五月雨)	祭の恋(天辻作)
九	空ぼの 香 水	辻君 燕子(満花城作)	忍ぶ恋 (満花城作)	花の香(城月作) (元唄我がもの)	五月雨	
一〇	春の雨(城月作)	露の玉 (色氣ないとて)	行春(城月作)	鯉幟(元唄川竹)		
一一	洗髪(城月作) (元唄薄墨)	愚痴	粹な浮世	機どころ (元唄一声)	更けてあふ夜	
一二	子規(城月作) (元唄空ぼの)	片栗の花 宇治(満花城作)	草の月 牡丹(城月作)	春名残		
一三		杜若(城月作)	霞(城月作)			
一四			(元唄書き送る)			
一五	書き送る		(天辻作)			
一六						
一七						
一八						
新東亞(天辻作)	うそと誠 舞扇(満花城作)					
八咫鳥(天辻作)	八紘一宇 (天辻作)					
飾り山のみ	飾り山のみ	飾り山のみ	飾り山のみ	日中戦争		
				飾り山のみ		

																	昭和一九
三三二	一 声	宇治茶	海晏寺	重ね扇	二八	空ほの	鶯	鶯	一五	浅くとも	書き送る	初萤(石南作) (元唄 秋の夜)	紫(石南作) (元唄 薄墨)	一 声	空ほの	田植もどり	二〇
香水	忍ぶ恋路	わがもの	五月雨	五月雨	一 声	鶴の巣籠	更けてあふ夜	辻 君	田植戻り	短か夜	八幡鐘	かきつばた (満花城作)	宇治 (元唄 満花城作)	忍ぶ恋路	香	かきつばた (満花城作)	一 声
空ほの	逢ふて別れて	水の出端	玉 川	薄 墨	玉 川	川 竹	門の青柳	薄 墨	八幡鐘	短か夜	八幡鐘	かきつばた (満花城作)	宇治 (元唄 満花城作)	香	かきつばた (満花城作)	一 声	二一
話しらきて	打 水	萩桔梗	空ほの	打 水	忍ぶ恋路	一声は (蚊帳売り)	川 竹	川 竹	仇 波 (高橋掬太郎作)	仇 波 (元唄 萩桔梗)	書き送る	薄 墨	薄 墨	香	仇 波 (高橋掬太郎作)	一 声	二二
花 箕	春八霞 (城華子作)	若草(城華子作)	行 春	川 竹	鯉のぼり (城月作)	橘(城月作) (元唄 萩桔梗)	五月雨	春惜む(城月作) (元唄 秋草)	重ね扇	福寿山(天辻作) (元唄 雪巴)	花 箕	五月晴(天辻作) (元唄 夏は萤)	五月雨	新憲法(天辻作)	五月晴(天辻作) (元唄 夏は萤)	一 声	二三
	露草(城華子作)	菖蒲浴衣 (城華子作)	花 箕	夕 暮	大城端町誕生 (天辻作)	夏は萤 (都山喜治作) (元唄 萩桔梗)	玉 川	春祭(天辻作) (元唄 夕暮)	わがもの	新憲法(天辻作)		五月雨	五月雨		新憲法(天辻作)		二四
																飾り山のみ	

〔庵唄年表〕

												昭和三三	
四六	四五	四五	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三四	三四	
空ほの	夕暮	重ね扇	一声	海晏寺	薄墨	夕暮	浅くとも	空ほの	ふでの笠	五月雨	惜春(石南作) (元唄薄墨)	夕暮	沖の瀬に(仇波) (高橋掬太郎作)
薄墨	忍ぶ恋路	話しらけて	空ほの	ほとぎす	香 水	薄 墨	忍ぶ恋路	話しらけて	ほとぎす	香 水	話しらけて	薄 墨	ほとぎす
宇治茶	薄 墨	玉川	夕暮	逢うて別れて	打 水	草の露	辰巳	重ね扇	うつり香	書き送る	夕立	打 水	夕立
夕暮	打 水	みれん	辰巳	夕立	明けの雀	梅雨の月	さび鮎	白扇の	空ほの	草の葉に	辰巳	重ね扇	重ね扇
(元唄 夏は螢)	花のかげ (城月作)	春惜む(城月作) (元唄 秋草)	花 筷	宇治茶	春祭(城月作) (元唄 五月雨)	橘(城月作) (元唄 雪巴)	春はのどかに (城華子作)	玉川	橘(城月作) (元唄 萩桔梗)	花のかげ (元唄 夏は螢)	春風	春風	春風
春 風													五月雨

										明治 七年
五年	四年	三年	二年	一年	〇年	九年	八年	八年	院田	松井
小平 竹屋	大屋 卷辺	金 丸田	小北 柴崎	田 村中	保 高	船 見	松 島	石動屋 平右衛門	院	院田
彦太吉 右左衛門	吉左衛門 甚六	丸田 伝九郎	嘉新 兵衛	宗嘉左 衛門	伝左衛門	磯右衛門	榮 造	平右衛門	次	平
笹松 井島	平山 村	岩石 倉	増高 山田	上大 野瀬	山本	島本 三右衛門	東 安太郎	谷口	大	瀬
作又 十郎	庄左衛門 喜六	崎 久左衛門	甚太郎	甚三郎	林吉 藏助	茂右衛門	和 田	大市	倉	要 藏
直 シ 金 一 円	直 シ 金 一 円	直 シ 金 一 円	直 シ 金 一 円	直 シ 金 一 円	直 シ 金 一 円	直 シ 金 一 円	直 シ 金 一 円			
岩小 崎原 彦コ 助ト	大都 岡山	荒 千川 木	野 伊藤 田	龟 池	浅 野 日	米 (十 原 日 喜 八	宮 (十二 永 平 右 衛 門	米 (九 原 日 平 右 衛 門	浅 田 (五 月 野 十 茂 日 平	浅 (五 月 野 十 茂 日 平
田藤井 村 宗次 右衛 郎門	利喜 一助郎	久文 左衛 門	勝 右衛 門	芽 伊 平 衛	喜 八	金 藏	日 (十三 田 藤 七	村 (十一 田 源 三 郎	福 部 平 甚 助	矢 五月 田 十三 日 郎
	日原 野	原 平 甚 衛 門	吉 岡 宇 喜 平 次	宮 栗 山 岡 新 伊 三 郎 衛 門	岡 池 (十二 田 藤 七					
	酒直 シ 金 一 升 円	酒直 シ 金 一 升 円	酒直 シ 金 一 升 円	直 シ 金 一 円	直 シ 金 一 円					

明治一六年	高石桑崎喜太郎	井岸口作加市藏郎			
一七年	富小竹井彦市棚増田山忠庄助藏				
一八年	不景氣ノタメ山・庵ハ出ストイヘドモ、経費節減ノタメ稽古番ハ廃ス				
一九年					
一〇年					
二〇年					
二一年					
二二年					
二三年					
二四年					
二五年					
二六年					
北橋保高 永場伝左衛門 庄セ蔵イ 金田中田 茂嘉左衛門 平門	松山島本 田本茂右衛門 榮理藏郎門 開谷口安 大楼市	山平浅 本瀬野 文理森之 次郎八助 柴松 田井 閨菊五郎 山堂川 村前合 榮政幸 太郎吉作 浜荒 屋井 清彦 一郎郎 山佐松 村竹島 重善伝 太次郎 吉治 丸中 川川 八甚 助藏 伊沼院 東田田 安伊次 太郎吉平 大船見 杉磯右衛門 佐太郎	伊沼院 東田田 安伊次 太郎吉平 大船見 杉磯右衛門 佐太郎	不景氣ノタメ山・庵ハ出ストイヘドモ、経費節減ノタメ稽古番ハ廃ス	高石桑崎喜太郎
直シ金一円	直シ金一円	直シ金一円	直シ金一円	直シ金一円	直シ金一円
浅栗宮山 井岡新清 右衛門助 小高柴島 喜藤平次 藏	村宮井岡 弥伊三郎 田原 弥三郎 直シ金一円	千川田 久左衛門 与作 米浅原野 清喜一郎 直シ金一円	米原木 平右衛門 平文 善吉 宗兵衛 吉 伊野村 勝左衛門 小平 田山川本 宗兵衛 吉 伊藤村 勝小 平 酒直シ金 一円 二升	岩北 崎林 喜権一郎 浅吉 宮米 永原 八吉郎 久次郎 酒直シ金 一円 二升	細藤井川 藤右衛門 三吉 千田原理 与平次 酒直シ金 二升

		明治二七年									
		二八年	二九年	二九年	二九年	二九年	二九年	二九年	二九年	二九年	二九年
三八年	日露戦争 曳山ナシ	野田松 村村島 定与栄 次郎作	種吉石 部田崎 与金庄 太作藏郎	田齊安 藤谷 宗左衛門郎	桜堀伊 井川東 健理卯 健之介	高岸石崎 桑喜太郎 市郎	松小島 竹井又由喜 十次郎郎	吉北矢 崎崎部 の新栄三 郎			
		米北 沢市 喜吉太 門郎	棚坂 田永 七卯一 郎郎	広山 瀬本 外宗次 五郎郎	山金 名田 外卯一 三郎郎	四月一 五日大火、 大工町山 藏焼失。 曳山ナシ	田福 代原 忠佐太 作郎	田篠 中井正作 兵衛	平川辺 野清左 衛門		
三七年		酒直 シ金 一一 升円	酒直 シ金 一一 升円	酒直 シ金 二升円	直 シ金一 円	直 シ金一 円	直 シ金一 円	直 シ金一 円	直 シ金一 円	直 シ金一 円	直 シ金一 円
		村浅 井野 茂辰太 郎	浅福 野原 宇作次 八郎	田荒 川木 久文太 郎平	村千 田田 庄文太 郎郎	大都 岡山 利喜一 郎	長井 谷口 次作 吉藏				
三六年		宮小 岡柴 伊喜 三平 郎次	米米 原原 平右久 衛門郎	土和 山田 重安次 郎助	渡浅 辺野 清喜 兵衛平	松岩 本倉 善左衛 門郎	小日野 原平左 衛門	原池 田 甚藤 太藏郎			
			直 シ金一 円三〇 銭	直 シ金一 円三〇 銭	直 シ金一 円三〇 銭	直 シ金一 円三〇 銭	直 シ前年通 り	酒直 シ金一 二升円	酒直 シ金一 二升円	酒直 シ金一 二升円	酒直 シ金一 二升円

四年	三年	大正二年	四五五年	四四年	四三年	四二年	四一年	四〇年	明治三九年
上俵小野竹 庄米文次 藏郎治 相本川折 岩友次郎吉	田松篠中 島井嘉左衛門郎一 久初榮太五郎藏 松大田井 市常次郎郎	北田松永尻田 利伝善三作郎藏 伊藤東田 山船見本 磯右衛門郎	宮松增永島山 甚右善次作門郎 谷沢口田 安常太郎郎	市塚大田村 井小甚三郎郎 細山川下 与藤八郎郎	増池宮山田岡 次榮宇三郎郎 細山川下 秀清次郎郎	野岡田村村中 仁理為四三次郎郎 桜山井下 秀清次孝郎	保今今高村井 仁弥他三八作郎郎 卷川那田辺 甚庄五郎三		
直シ金一円	直シ金一円	直シ金一円	直シ金一円五〇銭	直シ金一円五〇銭	直シ金一円五〇銭	直シ金一円五〇銭	直シ金一円五〇銭	直シ金一円五〇銭	酒直シ金一升円
西篠 川井 卯外三郎吉 高米桑田 又左佐衛門郎	米浅 原野 久宇次郎八 荒米 木原 友平一吉郎	池荒 田木 藤文太郎平 小岩 柴崎 コ彥ト助	高高 畠正 多甚一吉郎 徳丸 永岩 太岩八郎松	芳千 里原 富次 義吉 大梅 岡本 利与三郎郎	倉小 谷柴 文喜太造郎 宮荒 岡木 幸文次郎平	斉金 藤村 八伊ツエ左 伊長 藤田 巳竹之助郎	伊松 藤田 勝左衛門郎 八伊ツエ左 伊長 藤田 久清太郎郎		

三年	二年	一年	一〇年	九年	八年	七年	六年	大正五年
池増野 田山村 辰正理 三一 二郎郎	今野山 井村本 他定三 八次 郎郎治	伊藤美 濃尻谷 勝左五 次三 衛門郎郎	山松米 本田 村伝 久右幸 太郎門郎	桜浅松 井野島 与吉直 次郎次治	最能住 大田 原理 清右治 右衛門 吉門	沢石大 崎田 新常 喜一郎 常次衛 門吉郎	斎金堀 藤田川 弥卯理 吉太郎 一郎郎三	神米堂 沢沢前 銀文和 三行造郎
大山山 井下下 善次清 次次郎 作郎	桶石和 師崎田 竹庄太 次太一 郎郎郎	吉松健 田井名 は金常 次二郎	高木西池 木川田 小左市 長太郎 左衛門 松郎	中長山 谷島川口 米喜左 次郎六郎	和高 田桑 吉み太 な郎ほ	広増 田山 与き 丞く	荒安 木谷 作文 次郎 藏	広米 田沢 与安太 丞郎
直 シ 金 五 円	直 シ 金 五 円	直 シ 金 五 円	直 シ 金 五 円	直 シ 金 五 円	直 シ 金 三 円	直 シ 金 二 円	直 シ 金 二 円	直 シ 金 二 円
岸荒米 沢木原 喜清文 八郎作 藏	米荒杉 原本本 栄文 藏平磯	高米千 桑田川文 右佐み 衛門郎ひ	池徳高梅 田永畠本 栄他多や 次八郎吉を	松千小大 原原柴岡 弥次常理 三郎吉郎	庄村高小 田田沢野 外作栄長 次三郎吉郎	浅米和 野原田 辰清安 次一之郎 吉郎助	荒 木木 文清 平作	浅宮 野岡 喜伊三 平郎
永浅米 井野原 他宇平 一吉八郎	松浅和 本野田 伝右辰安 衛次之郎 門郎助	村浅宮 井野岡 茂喜伊 太郎平郎	荒荒岩 木木崎 文友安 太郎平吉	中村倉宮 田田谷岡 徳庄文幸 一藏郎藏郎	伊竹田本 林川折 勝左嘉利 太門市郎藏	米浅野 原野村 平宇小 一郎八兵 衛	岸米 沢原 喜文 八郎藏	杉村 本井 茂太 磯郎
		直 シ 金 二 円五 〇錢	直 シ 金 二 円五 〇錢	直 シ 金 二 円五 〇錢			直 シ 金 一 円	直 シ 金 一 円三 〇錢

八年	七年	昭和六年	昭和六年
今野美濃 井村谷	山松桜 村島井	沢金北 田田島	
他定謙 八次郎治	久直与次郎治	常卯源一郎作	
松神野	吉健西	浅最高	
島沢村	田名川	野住桑	
直銀理一 治行郎	与常佐二太作郎	吉勝み太な次郎ほ	
酒直 シ金 一升円	酒直 シ金 一升円	直 シ金 五円	
一 一年	一 〇年	昭 和 九 年	
大本笛 井折井	本中佐 谷島竹	山増石 下山崎	
常よ作 次兵郎ね衛	金米辰次一助郎郎	次庄庄三太作郎郎	
城石杉	船増市	高藤大	
端尾井	見山村	田田井	
病佐理 太吉院郎郎	貞善甚 良藏作	知助善 次次雄郎郎	
酒直 シ金 一升円	酒直 シ金 一升円	酒直 シ金 一升円	

※西下町稽古番記録

五年	四年	三年	昭和二年	一五年	大正一四年
和能増 田崎山	本西山 谷川本	安荒堀 谷木川	諒闇ニツキ曳山ナシ	大伊笛 井東井	増船谷 見山口
吉治き 太郎吉の	初佐憲 太太郎孝	文才理吉 藏治三		常安作兵衛	磯右衛門万
宮明竹	窪岩米 崎田太田 郎ナ右衛門郎	米堂広 沢前田		松荒本 木折	藤市松
本瀬内				清良友 左衛門助吉	田村田
次清清 吉吉吉					助甚栄 次郎作藏
	直 シ金 五円	直 シ金 五円	直 シ金 五円	直 シ金 五円	直 シ金 五円
宮中大 岡田岡	山上岸 本坂	菊村古 地		千岩宮 原崎岡	伊野山 藤村下
周徳理 三郎藏郎	甚ま佐 太吉す郎	田野 伊 右外才 門吉郎		次順伊 三吉二郎	巳小清 之兵 助衛之
高岩田 畠崎川	倉徳有 谷永川	金千梅 村川本		伊杉北 藤井林	竹宮村 林岡田
多彦五 吉助平	常他辰 八次 藏郎郎	伊みや つ 佐いを		久き喜 三 藏ぬ郎	嘉宇庄 平一 市次郎

昭和二二年	二三年	二四年	一五年	一六年	一七年	一八年	一九年	二〇年	二一年	一二年
堀伊荒 川東木 理安良 吉太之 三郎助	堂安米 前谷沢 正文文 一藏造	堀伊荒 川東木 理安良 吉太之 三郎助	米巻相 原田地 文理善 三藏郎太	日中戰爭	島沢竹 田原 辰作伊 三藏郎郎	太平洋戰爭	太平洋戰爭	太平洋戰爭	太平洋戰爭	松川今島沢 島向井 田 直幸英辰作 治作三一藏 野美西健最 濃 村谷川名住 貞謙佐常勝 太次太 男治郎郎郎
直 シ 金 一 〇 円	直 シ 金 三 円	直 シ 金 三 円	直 シ 金 三 円	直 シ 金 三 円	直 シ 金 三 円	直 シ 金 三 円	直 シ 金 一 〇 円	直 シ 金 一 〇 円	直 シ 金 一 〇 円	直 シ 金 一 〇 円